



びすけっと

222号—2021年6月—

埼玉県立小児医療センター

血液・腫瘍科

親の会 びすけっと

もっとみなさんにつながれるように…
Instagram始めました！

https://www.instagram.com/biscuit_oyanokai/



AYA week 2021

「若い世代とがん」の今を世の中に発信するため、AYA がんの医療と支援のあり方研究会の主催で、3/14～3/21 にオンラインで様々なイベントが実施されました。成田赤十字病院小児科副部長の寺田和樹先生の講演を視聴しましたので、概要をお伝えします。(柳戸)

「入院中の高校生ががん患者に対する遠隔技術を用いた学習支援とその成果」

寺田先生自身も高校生の時白血病を発症し、特別支援学校で高校の学習をした後原籍校に復学した経験がある。成田赤十字病院の小児科では血液腫瘍性疾患の患者は20歳まで診療しているため、高校生の復学支援も多く経験している。治癒のみならず社会復帰を意識して治療に取り組んでいる。入院環境の影響は退院後の社会復帰にも影響する。そのため、入院中から支援を行うことが重要。2012年に全国で実施された調査によると、30日以上入院した高校生が学習指導を受けた割合は31.4%（小・中学生は57.2%）。4割弱は退学している。院内学級や特別支援学校があっても高校教育は義務教育ではないため、高校生の受け入れが難しい場合がある。学習支援を行っても出席日数を満たすことや単位を取得することが困難な場合が多い。このような現状だと将来への不安から治療への意欲が低下してしまう。2019年から文部科学省によるモデル事業が開始された。病院と在籍校との教育支援の調節、入院中の病院への教師の派遣や遠隔授業、退院後の復学支援などが実施されている。徐々に教育保証体制が整いつつあるが、症例数が少なく経験が集積されないなどの課題がある。モデル事業以外にも分身ロボットを用いた遠隔授業の取り組みもある。遠隔事業での単位制限の緩和など復学を見据えた支援が重要。復学後も学習・友人関係・外見など社会的苦痛がある。成田赤十字病院では、それまで院内学級は小中学生のみ近隣特別支援学校の教師が派遣されていた。高校生を受け入れている特別支援学校でも授業内容、授業日数、原籍校に復学したときの単位認定などの問題があり、がん患者の受け入れは難しいと思われた。初めて担当した高校生について原籍校の理解を得て、入院中は特別支援学校に転学し退院後原籍校に戻る取り決めをし、原籍校のシラバスでの授業や試験、単位認定について協力を得た。授業日数の確保が最も困難だったが、その後病院で専用のパソコンを用意し、遠隔技術を導入した学習支援を実施し、教師の負担軽減に役立っている。退院時にも復学支援のカンファレンスを実施し、復学のための環境整備を行っている。校内をバリアフリーに改修してくれた例もある。復学支援は治療の一環としても重要。学習支援・復学支援を実施してから、対象となった高校生全員が留年することなく復学することができた。卒業できることが決まっているからこそ、将来に向けて努力することができる。今後は病院内に中高生の学習部屋を用意するなど学習環境を整備したい。遠隔授業の促進やオリヒメなどの活用によって学習空白の低下につながる可能性がある。今後、この成果を全国に広めていく必要がある。がんの子どもを守る会を中心に復学についての研究を行っているので、協力いただける人は連絡してほしい。(次号に続く)

会報220号でお伝えした高次脳機能障害についての講演会の内容は、がんの子どもを守る会の機関誌「のぞみ第205号」に掲載されています。ご覧になりたい方はびすけっとまでお問い合わせください。

今回のびすけっとは、

7/13(火)11:00～

相談室B(2F 総合受付奥)

※変更がある場合、
来る前にインスタやLINE
で確認してね。

びすけっと連絡先：代表 柳戸 民子

〒350-2224 鶴ヶ島市町屋112-5

TEL 049-271-4708 (留守電)

e-mail yanagido@t.zaq.jp

柳戸LINE、QRコード ラインでのご連絡もOK!

